書評：小西真理子著『共依存の倫理――必要とされることを渇望する人々』（晃洋書房、2017年）

安井絢子[1]

１．はじめに

『倫理学研究』第 49 号のなかで本書の書評[2]を執筆させていただく機会に恵まれたのだが、その際、紙幅の都合上、内容に踏み込んだ議論にほとんど触れられずに終った。というのも、本書は、書名が示すとおり、「共依存」という人間関係のなかでも、特殊な人間関係の一形態を扱っているため、一般的に考えれば、倫理学の観点から読み解く必要があるとは言いきれないからだ。そのため、そもそもなぜそうした観点から読み解くことにしたのかを明らかにしなければ、ある程度有益な議論を提示し得ないのではないかと考えた。だからこそ、内容に踏み込む以前に、なぜ倫理学、それもケアの倫理という倫理学理論としてマイナーな、それどころか、現在もなお倫理学理論とは認められているかどうかという問題が論点とされうる[3]観点から、読み解く必要があるのかを、説明する必要があると考えたわけである。そうした点に目配りする必要を感じたために、先の書評では、本書の内容に十全に言及し得ずに終わった。しかし、場合によっては、書名にあるとおり、本書は『共依存の倫理[4]』というふうに「倫理」と冠せられているのだから、「倫理」という観点から読み解いたとしても、何の違和感もないと思われる向きもあるかもしれない。たとえば、評者に先立って、本書にたいする書評[5]を著しておられる早川先生は、本書において、共依存を克服するための既存の回復プログラムを批判的に検討することで、共依存関係を、「人間として未熟で不

1　安井絢子（やすい　あやこ）。京都大学非常勤講師。

2　『倫理学研究』、第 49 号、143-145 頁を参照。

3　ケアの倫理を規範倫理学のひとつの立場として扱う場合も増えてきてはいる。たとえば、レイチェルズ(Rachels 1999)は、フェミニズムの分派としてではあるが、ケアの倫理を取り上げているし、また、ケアの倫理の日本への紹介者の川本（川本 1995）はケアの倫理に一定の評価を与えている。田中（田中 2012）では、義務論、功利主義、徳倫理学といった規範倫理学の３つの潮流に加えて、ケアの倫理をもうひとつの立場として扱っている。とはいえ、こうした動きとは逆に、ケアの倫理を扱わない規範倫理学の入門書も散見されるという。したがって、ケアの倫理が規範倫理学のなかで、確固たる地位を築いたとまでは言い難いし、また、そのためには、ケアの倫理の理論研究がより活発になされる必要があるだろう。

4　傍点は評者による。

5　早川 2018。

健全な状態（関係性）」[6]として否定的に捉える価値観の背後に潜む、人間観や自己観、倫理観の浅薄さが浮き彫りにされている点を高く評価しておられる。こうした点では、本書を倫理という切り口から読み解くことにも一定の妥当性を見出しうるだろう。

おそらく、こうした読み方が、本書における「倫理」の部分に注目して読む場合の穏当な仕方であろう。とはいえ、早川先生と同じようなアプローチをとって本書を読み解こうと試みたとしても、本書の魅力について新たな視座を提示することにつながるかどうかについては疑問が残るし、また、紙幅を気にせず存分に書くことのできる機会をいただいた今、なぜ本書を倫理学の視点、それもケアの倫理から読み解く必要があるのかという点をあらためて確認することから始めて、ケアの倫理という切り口から本書の捉え直しを図りたい。こうした遠回りに疑問をもたれる読者の方には、本書の目次[7]をご覧いただければすぐに、そうした切り口をとることにたいする説明の必要性をご理解いただけるように思う。

繰り返しになるが、本書の書名には「倫理」と冠せられている。だからといって即座に、倫理学の観点から読み解こうとすることは早計に思われる。たとえば、本書を精神医学的な観点から読むのであれば、本書は共依存についての歴史や、その一般的な治療実践、回復プログラムを批判的に検討した書として捉えることができる。前述のように、早川先生の書評においても、共依存関係を分析するなかで、その背後に潜む人間観や自己観、倫理観が浮き彫りになってくると示唆されている。とはいえ、これはおそらく小西さん自身も、そうした点の析出を主眼にしているというよりは、当事者の声に寄り添った形での記述、そしてそこから、既存の回復プログラムの必要性をも一定程度認めたうえで、それを批判的に検討すること、すなわち、当事者の生の声に寄り添い、既存の枠組みから捉えられがちな共依存を異なるパースペクティヴから捉え直すことで、異なる見方を提示すること[8]に注力された結果、まさに「浮き彫りにされた」示唆にほかならないのではないだろうか。すると、本書を読み解く際には、通常は、共依存を扱うことの少ない倫理学よりはむしろ、精神分析学や精神医

6　同上。

7　本書は、２部構成から成る。第１部「共依存の概念史」では、第１章「共依存概念の誕生史」、第２章「共依存の病理化」、第３章「共依存と精神分析」というふうに、共依存という人間関係の一形態の捉え方の変遷が確認された後、精神分析理論との関連や既存の精神分析理論からみた共依存の評価が示される。次いで第２部では、第４章「共依存とフェミニズム」、第５章「共依存とトラウマ論」、第６章「共依存と回復論」とつづき、ラディカル・フェミニズムやフェミニズム心理学などのフェミニズム理論からの批判を取り上げたうえで、当事者の生の声に傾聴し、そうした生の声を反映する形での新たな回復プログラムの示唆がなされている。

8　こうした姿勢のなかに、小西さんが、ギリガンの姿勢を継承して、それを実践場面に展開しようとしていることを見出しうるように思われる。とりわけ、異なる捉え方を見出そうとする手法は、ギリガンの提示した「反転図形の比喩」(Gilligan 1987)を実践場面に応用したように映る。

学といった観点から読み解く方が自然な仕方であると言えるかもしれない[9]。とはいえ、もちろん、書名が示すとおり、小西さんが読者に訴えたい点は、おそらく、共依存という人間関係のひとつのあり方から見えてくる倫理観を析出するところにも存することは確かであり、だからこそ、やや遠回りではあるが、倫理学の観点、とりわけ小西さんご自身がそのご研究のなかで、少なからぬ時間を費やして取り組まれてきた、ケアの倫理を切り口に読み解くこともまた、正鵠を射た読み方とはいえないまでも、決して的外れな読み方とまでは言えないはずである。

ここで、本書をケアの倫理から読み解いていく際の心構えとして、品川先生の『正義と境を接するもの』第７章冒頭の記述を参照することから始めたい。

> ある主題の内容をどのように説明するかは、その主題をいかなる問題の連関のなかに位置づけるかに応じて変わってくる。このことはどんな主題にもいえることだが、とりわけ、さまざまな文脈に結びつく可能性をもった主題にあてはまる。ケア――配慮、気づかい、世話、思いやり――の倫理はそうした主題のひとつである。[10]

上記のとおり、ケアの倫理はそのつかみどころのない理論構成と、何よりも、医療・看護・福祉・教育といった、ケアと関連の深い多くの分野と影響をし合い、そうしたケアの営みの結節点において成立したために、「さまざまな文脈に結びつく可能性」を秘めた理論である。このことから、ケアの倫理は、それが使われている文脈に繊細である必要性がきわめて高く、また、ケアの倫理を扱う際にはそうした点に慎重であることが求められている[11]ことがわかる。この点を念頭に置いたうえで、次節では、なぜケアの倫理から本書を読み解くことにしたのかを、簡単に確認していく。

２．なぜケアの倫理から読み解くのか

9　倫理学とは異なる観点、すなわち精神医学の観点からの書評として、小西聖子(2018)がある。

10　品川 2007, 140 頁。

11　本稿における「ケアの倫理」は、ギリガンが創始し、ノディングスが展開した英米圏で論じられる狭義の「ケアの倫理」である。こうした「ケアの倫理」とは別に、ケアの営為にかかわる議論を取り上げたケア論は多く展開されている。たとえば、品川先生は、ギリガンから始まったケアの倫理と、哲学的ないし人間存在論的なケア論との違いを指摘したうえで、後者を「ケアについての倫理」と呼び表している(品川 2007, 第七章)。

2.1 ケア概念と共依存概念の曖昧さ

さて、上述の品川先生のご指摘は、ケア概念のみならず、共依存概念にも当てはまるように思われる。小西さんの説明によれば、共依存についての確定的な定義を示すことは難しいわけだが、そうした定義づけの困難さは、ケアの倫理と共依存概念が軌を一にする点だと言えるかもしれない。当然のことながら、ケアの倫理は、ケアという視点を大事にする（ケアする）倫理理論[12]である。一方で、そうした「ケア」という語がどういったものなのかは文脈依存的であり、曖昧だ。上述の品川先生からの引用においても、ケアという語を説明する際に、「配慮、気づかい、世話、思いやり」といった、ケアの多様な側面が指摘されている。この他にも、ケアには「重荷」や「心配」といった意味合いも含まれており、ケアが身体的な「世話」、精神的な「気づかい」や「配慮」といった意味合いをもつとともに、ポジティブな側面とネガティブな側面をもつ両義的な概念であることが理解できる。このことからも、ケアという語が一口には言い尽くせない広がりをもつ概念であることは明らかだ。同時に、こうしたケアという語がもつ幅広さが、ケアをつかみどころのない曖昧な概念にしていることも確かだろう。こうした概念の曖昧さ、および両義性という点を、共依存とケアの類似点として指摘することができる。すると、共依存を読み解いていく際の枠組みであるケアの倫理のみならず、その分析対象とされている共依存をも慎重に考慮しなければ、見当外れな議論に陥りかねないことがわかる。とはいえ、そもそも曖昧で両義的な概念を、曖昧で両義性を有する概念を理論の核心に据える枠組みから捉えることは適切なのだろうか。この点を検討するために、カント主義や功利主義といった確固とした理論体系を有する主流の倫理学理論ではなく、曖昧で両義性を有する概念であるケアを理論的基盤に据えるケアの倫理からアプローチすることがなぜ適切だと考えたのかについて述べていく。

2.2 なぜケアの倫理なのか

ケアの倫理は、ケア、すなわち、ケアしケアされること（ケア関係）を重視する倫理理論である。一方で、主流の規範倫理学理論は、カント主義であれ功利主義であれ[13]、独立した合理的判断能力を有する個人を想定して議論が組み立てられている。こうした観点からすれば、個人として、自律することができないことや合理的な判断が下せないことはもちろん、

12　Noddings 1984, chap.1.

13　ギリガンは、コールバーグの道徳性の発達理論が拠り所とする、こうした主流の倫理学理論を「正義の倫理」と呼び、ケアの倫理と対置した(Gilligan 1982)。

共依存関係のように、そうした状況に甘んじて合理的な判断をし得ない関係は、そもそも一考の余地もなく批判されるべきものとみなされるだろう。仮にこうした立場から共依存関係を取り上げることがあったとしても、そうした関係を正すことを行為指針として提示するとか、批判的な評価を下すといった形でのアプローチにとどまることになるだろう。

また、行為者に注目する議論を展開し、善き生を志向する徳倫理学でも、行為者を個人として捉える基本姿勢は、カント主義や功利主義と軌を一にするだろうし、また、共依存を善き生のあり方、有徳な行為者が目指すべき開花繁栄とはみなすべくもない。すると、ケア関係という人間関係を倫理的基盤と考え、人は誰しも、多かれ少なかれ、誰かや何かに依存して生きているという人間観をとるケアの倫理が、少なくとも主流の規範倫理学理論に比べて、共依存を無理なく扱いうる選択肢として浮かび上がってくる。さらに言えば、小西さんも取り上げておられるように、共依存関係は、家庭内で再生産され、次世代に引き継がれてしまう傾向が強いという特徴に鑑みても、「家庭から出発」[14]し、次世代への配慮をその理論の核心に含むケアの倫理は、共依存を分析する枠組みとして妥当であると言えそうである。こうした意味で、人間関係の一形態である共依存を分析する際に、ケアの倫理からアプローチすることは、他の代表的な倫理学理論と比べても、一定の有効性があるとともに、少なくとも他の規範倫理学理論からアプローチするよりは適切な仕方であると言って差し支えないように思われる。ただし、そのときに、上記の慎重さ、それがどういった文脈で論じられているかについて、繊細である必要を忘れてはならないことは、前述したとおりである。というのも、そうした繊細さを見失ってしまえば、個別性を重視するケアの倫理は途端に、恣意的な判断をもたらしかねない危険性を帯びてしまうのであって、そのため、ケアの倫理の細やかな対応を可能にするという理論的強みを発揮し得ない事態に陥ってしまいかねないからだ。こうした点に留意しながら、以下において、本書を、ケアの倫理という立場から読み解いていく。いくつもの論点が考えられるなかで、特に気になったのは以下の３点である。⑴「倫理」と冠せられている本書のなかで、共依存という人間関係の一形態にたいして、なぜ評価を与えないのか。評価をしてはならないと断言できる根拠は何か。すなわち、評価しないことで、理論的・実践的にどういった効果が得られるのか。それに関連して、⑵回復に資する方向をなぜ目指さず、あくまでも破滅的な関係を導きかねない主張を提示するのか。読者として誰を想定して呼びかけているのか。⑶倫理的論点になぜ踏み込まなかったのか。

[14] Noddings 2002.

自立と依存、愛、偽物と本物、真や偽とはどういった意味で使用されているのか。小西さんが疑問を呈する「倫理」ないしは「倫理学」とは何であり、それに代わって提示したい「倫理」とはどういったものなのか。順に取り上げていく。

３．３つの疑問点

3.1 疑問点①：共依存に評価を与えないことに伴う危険性

まず、本書の議論と私見とが明らかに食い違う点、すなわち、共依存にたいする評価の違いから指摘していく。というのも、この点の違いから、以降で論じる他の疑問も派生的に現れてくるからだ。

端的に言って、ケアの倫理の立場からみると、共依存という人間関係のあり方は、受け容れ得ない関係性の最たるものと評価せざるを得ない。前述したとおり、ケアの倫理が、人間を自律的なものとは捉えず、他者に依存せざるを得ない関係的な存在者[15]という人間観をとることは確かである。しかしだからといって、ケアの倫理は、どんな依存関係をも許容するわけではない。むしろ、評者の見立てでは、ケア倫理研究者は、この点について、とりわけ繊細かつ慎重に線引きを行い、議論を重ねてきた。たとえば、品川先生は、「自分を必要とするものが自分の手から離れそうになると、その自立をはばみ、いつまでも自分に依存するように仕向け、それによって自分の生きがいを保つ共依存の関係」は、「ケア関係の堕落として、本来のケア関係からすれば排除されるべきもの」と指摘している[16]。また、小西さんご自身も指摘するように[17]、ギリガン、ノディングス、キテイといったケアの倫理の主唱者たちはともに、共依存に肯定的な評価を下そうとはしない[18]。このように、一般的なケアの倫理の立場からすると、ケアする人とケアされる人との関係としては、双方向的なコミュニケーションが成立している相互依存的な関係こそが望ましいのであって、どちらか一方の考えや思いの押しつけといった、一方向的な関係に陥ることは望ましくないとされる。ケアの倫理が受け容れる依存的な関係とは、人間関係のなかでやむを得ず生じざるを得ない依

15　ノディングスは、こうした点を「関係的自己」(relational self)という人間観で表現している(Noddings 2002, chap.5)。

16　品川 2016, 15 頁。

17　小西 2016。

18　本書の終章、あるいは、小西 2016(を参照。このなかで、ギリガンへのインタビューや、ノディングスやキテイの記述から、彼女たちが共依存を人間関係の病理的なあり方と捉えていることが示されている。

存関係にほかならない。私たちは、子どものころは身近な大人や年上の人に依らなければ生きることもままならないし、病気になれば誰かの看護を、障害を負えば誰かの介助を、そして高齢になれば介護を必要とせざるを得ない。そうしたケア関係に共通するのは、人間の傷つきやすさ(vulnerability)と同時に、ケアする人とケアされる人との間の能力の非対称性である。こうしたやむを得ない生の事実が、ケアの倫理の人間観に反映されており、そのため、ケアの倫理は、人間の依存的な側面を肯定的に受け止める[19]立場を打ち出す。

しかしだからといって、ケアの倫理はすべての依存関係をよしとするわけではない。ケア関係、すなわち能力のうえで非対称な人間同士が織りなす依存的な人間関係において重視されるのは、成長という契機である[20]。ケアの倫理からすると、成長なき人間関係、あるいは、少なくとも成長を見込めない人間関係は、ケアする人にとっても、ケアされる人にとっても不毛な関係性にほかならない。もちろん、こうした成長という契機の重視は、ケアの倫理が発達心理学という道徳的成熟をめぐる文脈に出自をもつ点と関係があるだろう[21]。こうした観点が望ましいかどうかについては議論が重ねられる必要がある。たとえば、高齢者、具体的に考えると認知能力が衰える一方にならざるを得ない認知症高齢者などは、こうした成長を志向するケアの倫理で組み尽くせるかという問題は指摘しうるだろうし、こうした点が考慮すべき課題であることは確かだ。評者の見立てでは、ケアの倫理が提示する成長は、身体的ないしは精神的に「大きくなること」といった従来の「成長」のみを表しているわけではないと思われるが、こうした点について議論が不十分であることは否めない。

しかし、共依存関係は、こうした事例とは異なり、望ましくない関係、さらに言えば、病理的な関係として位置づけてしかるべき関係であることは、少なくともケアの倫理による共依存の捉え方として、穏当な解釈であるように思われる[22]。というのも、認知症高齢者とは異なり、共依存関係にある方々は基本的に、それ以外の関係を結びうる能力を有しているとみなしうるからだ。共依存関係から健全な関係に移行しうる可能性を有しているにもか

19　たとえば、キテイ(Kittay 1999)は、圧倒的な非対称性を帯びた依存的な関係を扱いながら、そうしたことを示しているし、ケア倫理研究者たちは基本的に、こうした人間観を共有していると言える。日本でも、金井先生(金井 2011)の議論や、また、小西さん(小西 2016)自身も、そうした点に着目している。

20　メイヤロフは、ケアリングを「最も深い意味において、他の人格の成長と自己実現を援助すること」(メイヤロフ 2005, 13 頁)と定義しており、こうしたケアの定義はノディングスにも継承されている。

21 ケアの倫理は、コールバーグの道徳性の発達段階にたいするギリガンの異議申し立てを発端として成立した倫理理論である。

22　たとえば、ノディングス(Noddings 2002)は、ナチスの高官の生育環境などに言及しつつ、ケア関係が「病理的なケアリング」(pathological caring)に変貌してしまう危険性に警鐘を鳴らす。とはいえ、この点に関するノディングスの記述においては、どういう規準や条件でそれを判定するのかという点は示されていない。

かわらず、そうした関係に甘んじたままでいるのは、怠慢と言わざるを得ないのではないだろうか。もちろん、そうした方々が健全な関係に至るためのサポートを惜しむことはあってはならないだろうし、社会が必要に応じて、そうした方々を支える必要があることは大いに理解できる。けれども、そうした関係にあること、そこに甘んじることをよしとしてしまうことには、違和感を覚えずにはいられない。早川先生は、小西さんの議論から引き出されうる「健全を一途に目指すこと自体の『不健全性』、不健全性や未熟さを許容しないこと自体の『不健全性や未熟さ』」[23]の示唆を評価しておられるが、健全な関係や成熟した関係を目指すことに、何を憚る必要があるのだろうか。もちろん、評者も、画一的な「健全さ」や「成熟」に固執し、社会が決めた「正常」や「普通」を目指す必要ばかりを説くつもりはない。しかし、社会で生きていく限り、自己や他者との一定の妥協点を見出しうる自己を形成しなければ、周囲にとっても、本人にとっても生きづらさを取り去ることはできないのではないだろうか。だとすれば、共依存関係の肯定とは、その人を受容しているように見せかけて、その実、その人の苦悩を放置し、結局、その人自身、その人の苦悩に関わろうとしないケアの倫理が最も忌避する態度の一形態にすら化しうる危険性を帯びた態度と言えるのではないだろうか。現に、小西さんがインタビューをされた共依存のなかで苦闘されている方々も、一定の健全さを目指して奮闘されているように評者には見受けられる。健全さや未熟さを脱しうる能力や可能性を秘めた人々がそこに甘んじることをよしとする姿勢は、評者には危うさをはらんだ主張であるように感じられてならない。金井先生も指摘するとおり、こうした共依存関係によって起こる親密圏のトラブルは、小西さんが取り上げておられるアルコール依存はもちろん、薬物依存などといった形で多く見られ、その帰結としてＤＶや自傷行為などの自他それぞれに向けた暴力性につながりうるという[24]。小西さんは、小西さん自身の前におられる当事者の声に傾聴し、その人の「感じ方を大事に」[25]しようとするあまり、こうした問題をいささか甘く見積もっていはしないだろうか。ケアの倫理が目指す理想が、他者のみならず、自己をも傷つけないところにあることを見失っておられないだろうか。小西さんは、終章において、「共依存という現象がさまざまな観点において両義的であり、そのような現象に対して、完全に肯定することも否定することもできない」し、さらに、「その判断に一定の結論を与えることこそ倫理的でない」と書いておられる。この記述からは、

[23] 早川 2018。
[24] 金井 2011。
[25] 本書の終章を参照。

小西さん自身は、共依存関係を肯定的にも否定的にも評価するつもりがないということが読み取れるはずである。すると、小西さんはギリガン同様、規範を示すことをしない立場をとっておられているということなのだろうか。このときの「倫理的でない」という表現から、小西さんが何を「倫理的」と考えておられるのかが気になった。確かに、倫理的評価を与えない姿勢をとることも可能ではあるだろう。けれども、だからといって、共依存にたいして肯定的ないしは否定的な評価を与える立場を何をもって「倫理的ではない」とまで断じることが可能なのだろうか。その根拠が、今そこにいる当事者のありのままの声をすくい取ること、従来の枠組みでは取りこぼされている方々を包摂するためであるということであれば、なぜ今現に共依存のなかで苦しんでいる状態のままで、あるいは少なくとも何の評価も規範も示さないままで、すくい取ろうとするのだろうか。小西さんの使われている「倫理」という言葉の含意とはどういったものなのだろうか。

さらに、ケア論の先駆者であるメイヤロフは、ケアされる人が「その人らしくなる」[26]ことをケアの特徴として挙げている。ケアの倫理は、その人らしさ、その人やその人たちが紡ぎ出す関係をありのままに受容することを説く倫理理論であるには違いない。しかし、それは、どんな関係をも丸ごと受け入れるということではないのであって、ケアされる人がその人らしくあること、そして、そうしたケアされる人をケアする人がありのままに受容することを示唆している。その際、ケアされる人が表明するニーズが必ずしも「その人らしくなる」ことにつながらない場合も考慮に入れなければならない。ケアの倫理は功利主義のように、その人のことは本人が最もよく理解しているといった合理主義的な人間観を採用してはいない。共依存関係では、そもそもその関係にある二人は、その人らしさを見失い、もはやどちらもケアされる人、ケアを必要とする人と化しているのであって、そうした関係は、小西さん自身も述べておられるとおり、ほとんどの場合、破滅的な事態しかもたらし得ない。ケアの倫理が「倫理」である限り、破滅をもたらす倫理的指針を、それが拘束力のない規範であったとしても、何の評価も与えないで受け止めることがあってよいのだろうか。そうした姿勢は、倫理的アプローチ、少なくとも規範倫理学のひとつの理論としては望ましいものとはとうてい言い得ないことは確かだろう。

以上のことから、少なくとも、共依存にたいする小西さんの主張は、ケアの倫理の一般的な主張とは異なるものであることは疑うべくもないように思われることが確認できる。も

[26] メイヤロフ 19 頁。メイヤロフの解釈については、品川 2016 を参照。

ちろん、この点については小西さんご本人も自覚されている点であり、また、小西さんは、ケアの倫理から共依存を分析するという手法をとっているわけではない。そのため、こうした食い違い自体には、理論上、何の問題もないかもしれない。しかし、『共依存の倫理』において、小西さんが取り組まれたことが、既存の共依存概念理解に疑いの目を向け、共依存にたいする既存の考え方を打破し、そこから見えてくる新しい倫理観や人間観を析出するところにあるとすれば、その先にどのような倫理観や人間観を描き出そうと考えておられるのか。私見では、ケアの倫理では、共依存関係をも丸ごと受け容れる規範を提示することは不可能である。そのため、ギリガンの「誰もが他者から応答され、仲間に入れられ、誰ひとりとして取り残されたり傷つけられたりしない」という理想のもとで、共依存関係にある人々の声にも傾聴し共感し、その声に応答しようとする姿勢までは、ケアの倫理は小西さんと共にあることができるとしても、それを受容する段階に至ったときに、見解を異にすることになる。小西さんは、どういった倫理観を想定したうえで、そうした共依存関係に一定の理解を示し、そうした関係を治療しようとするのではなく、肯定的にも否定的にも評価を与えないでよいと主張されるのだろうか。あるいは、そうした倫理観を想定するのではなく、あくまでも既存の共依存にたいするアプローチへの異議申し立てとして、その背後に潜む倫理観や人間観を暴き出すことをのみ目的としており、あくまでも共依存には何の評価も与えないのだろうか。もしそうであれば、理論上の問題は解消されるかもしれない。しかし、私見では、その点をより強調しなければ、読者にそうした姿勢を実践することを推奨しているように受け取られかねないのではないかという点が気にかかる。また、そうした姿勢を中核に据えた「倫理」とはどういう理論なのか評者には思い描くことができない。これが、第１の疑問点である。

3.2 疑問点②：理論と実践の関係をめぐる疑問

前述の疑問点①「共依存に評価を与えないことの危険性」と関連して、第２の疑問点として、理論と実践の関係をめぐる問題を小西さんがどう捉えておられるのかという点が気にかかってくる。ケアの倫理は実践を特に重んじる理論である。というのも、ケアの倫理の出自からしても、ケアの倫理とは、抑圧されてきた者、声を発することすらままならない者の声を聞き届けようとする姿勢、そうした人々を取り残すことなく、すくい取ろうとするところから成立したという経緯をもつからだ。実践を念頭に置かないケア、そうした人々の声を等閑視したケアは、もはやケアの倫理の本来のあり方とは言えない。このように、ケアの倫

理においては、他の倫理学理論以上に、理論と実践の結びつきが強固であるとともに、ともすれば実践優位の姿勢が見いだせるという特徴が指摘できる。このことは、ケアの倫理の強みともなりうる点として捉えうるのだが、一方で、私見では、実践を重んじるあまり、理論を蔑ろにすることは、ケア実践を倫理的指針をもたない空虚なものにしかねないようにも思われる。それゆえ、ケアの倫理とケア実践、すなわちケアをめぐる理論と実践のバランスが、両者いずれにとっても重要であるように思われる。

さて、上記で述べてきたことは、小西さんは重々承知しておられていることに違いないだろうし、この点についてはおおむね一致しうる見解をもたれているのではないかと思う。しかし、本書において、そのバランスがとれているのかが、評者には判断しかねる点だ。これは、疑問点①で述べた共依存の捉え方の違いから派生して生じた疑問である。繰り返しになるが、ケアされる人と同時に、ケアする人にとっての成長や成熟をも志向する関係性、あるいは、それを実現するための共依存からの回復に資することをなぜ目指さないのだろうかと、共依存をケアの倫理の立場から、あるいは個人的にも受容し難い評者には、小西さんの提示される主張が不思議に思われてならない。確かに、共依存の捉え方として新しい視点を提示するのは純粋な理論研究なら特に問題のないことかもしれない。しかし、小西さんが念頭に置いておられる読者、小西さんの呼びかけに応答することを想定している読者は、今まさに共依存のなかにある当事者やその家族といった、まさに今その現場にある人をも含んでいるのではないのだろうか。評者には、そうした実践を念頭に置いた研究で、破滅的な帰結をもたらすおそれをはらんだ価値を肯定的に扱う、あるいは評価を与えようとしないのは、危険を伴う場合があるように思われる。もしくは、あくまでも理論的な主張にとどまるのであれば、実際の現象として存在する共依存の回復プログラムを取り上げたり、具体的な事例に言及する必要はないのではないか。そうすれば、少なくとも読者に誤解を与える危険性を避けることができるように思われる。小西さんは、理論と実践とのバランスをどのように考えておられ、また、その呼びかけは誰に向けたものなのか。これが第２の疑問点である。

3.3 疑問点③： なぜ倫理的な論点に踏み込まないのか

最後に指摘する点は、疑問点というよりは、おそらく倫理学の観点、とりわけケアの倫理から読み解こうとするがゆえに生じてしまった、評者の個人的な願いのようなものと言った方が適切だろう。つまり、『共依存の倫理』のなかの「倫理」の部分をもっと知りたかっ

たという点だ。冒頭でも紹介させていただいたとおり、早川先生[27]も、本書において共依存の分析からその背後に潜む人間観や自己観、倫理観が浮き彫りにされている点を大いに評価しておられる。評者もまた、そうした評価に一定の共感を覚えつつ、こうした点を本書の魅力と感じるからこそ、もっと倫理的論点に踏み込んでいただきたかったという思いを禁じ得ない。たとえば、小西さんの今までのご研究、とりわけ自立と依存にかかわる問題を扱われたご研究[28]に、もう少し焦点を当てていただきたかったとも思うし、あるいは愛という概念の内実の明確化、本物と偽物、真と偽の相違とはどういったものかを示していただきたくも思う。評者の関心に即していくつか指摘していく。

まず、自律と依存という対立軸をめぐる論点についてだ。小西さんは、共依存関係を認めない姿勢のなかに、ケアの倫理が自立主義を踏襲していることが見て取れると考えておられる。終章で小西さんは、ケアの倫理は、「従来とは別の自立主義、すなわち、依存を伴った上での自立的なあり方を要請し」、「したがって、自立・依存の構図には、心理的に依存し続ける成人や、そのような成人同士からなる依存」が位置づく余地はなく、ケアの倫理にも「自立を尊ぶ個人主義が内在している」と主張しておられる。確かに、ケアの倫理を一元的に採用することを受け容れているのであれば、この指摘もある程度説得的と言えるかもしれない。しかし、ケアの倫理の主唱者で、ケアの倫理のみですべてが説明できると考えている論者は、少なくとも現時点では見られない。すると、たとえば、必要に応じて正義の倫理の規範、自立ないしは自律を援用することが、理論的にも、まして実践的な場面ではなおさらあって当然であるように思われる。むしろ、依存のみを礼賛し、自立的ないし自律的なあり方であるというだけで理論の外部に位置づけようとする姿勢は、ケアの倫理の他者の多様な価値観に共感的・受容的な姿勢とそぐわないように評者には感じられる。こうしたケアの倫理における自立ないしは自律にたいする姿勢はケアの倫理が「倫理」である限り、ある意味当然とるべき立場と言えるのではないだろうか。確かに、ケアの倫理は、徳倫理学が目指すような実現不可能な有徳者を理想として掲げることはしない。その意味で、共同体などによって規定された理想に向かうわけではないため、一見したところ、明確な善を掲げているとは捉えられにくいかもしれない。しかし、ケアの倫理が生の行程をその核心に含み、それが善き生の探究ではないからといって、仮にケアの倫理が、どのような生でも、そして、

27　早川 2018。

28　たとえば、小西 2016 などを念頭に置いている。もちろん、『共依存の倫理』のなかでも、註において言及はしておられるが、少なくとも管見では、この議論自体が直接取り上げられている印象は受けなかった。

どのような関係でも認めるとしてしまうのは、いささか粗雑にすぎる解釈ではないだろうか。むしろ、ケアの倫理は、生のあり方や関係のあり方については、他の倫理学理論以上に慎重であると言っても過言ではない。3.1 節でも指摘したとおり、ケアの倫理は、ケア関係が非対称的な個人同士で結ばれるものであるがゆえに、そこに能力の非対称性が生じざるを得ないことを認めつつも、双方向的なコミュニケーションを含んだ相互関係をこそ理想的なケア関係として掲げる。たとえば、田中先生は、規範倫理学理論の特徴を２つの種類に分けておられるが、その分類に従えば、ケアの倫理は徳倫理と同様、それぞれの規範を理想として掲げ、それを目指す理論として扱われている。どのような関係でも許容する理論は恣意性を誘発し、理想の実現どころか、相対主義を招くおそれをはらんでしまうのではないだろうか。

もちろん、小西さんの主張は、そうした共依存にたいする否定的な評価ないしは、そもそも評価すること自体にたいする批判を主眼としているのであって、ある意味では、ケアの倫理の生ないしは関係の捉え方が狭量に過ぎるという示唆だとも考えられうる。ケアの倫理が、それまで抑圧されてきた人の声、聞き届けられてこなかった人々の声に傾聴することから始まったという出自に鑑みても、こうした小西さんの姿勢は、共依存関係のなかにある方々の声を聞き届けるよすがになると捉えて、評価すべきなのだろうか。少なくとも、評者はこの点については賛成しかねる。もちろん、共依存関係にある方々の苦悩やつらさに、ケアする人は可能な限り共感し、寄り添うことはできるかもしれない。しかし、実際にケアすることと、ケアの倫理の立場としてそれを評価するかどうかはまた別問題だ。ケアの倫理は規範を提示する「倫理」である。その人にとっての恣意的でない善さについての規範、すなわち、「その人らしく」なること、成長することを志向するのは、あくまでもケアの倫理が「倫理」と名乗るのであれば、きわめてまっとうな帰結だろう。したがって、仮にケアの倫理にこうした姿勢をも掬い取るように要請するのであれば、それは過剰要求だと言わざるを得ないし、こうした批判はケアの「倫理」批判としては当たらない。だとすれば、ケアの倫理のなかに共依存を位置づけるよりは、別の概念にその可能性を見出す方が穏当であるように思われる。小西さんも触れておられるように、それは愛であるかもしれない。愛とケアは重なり合う点もある一方で、両者の概念にとって重要な点で相容れなさをももっている。共依存関係をある条件のもとであったとしても、肯定的に捉えようとするのであれば、そうした姿勢は、恣意性や偏性を究極まで突き詰めうる、ある種の愛にこそ可能なのかもしれない。

それに関連して、次に、小西さん自身も言及しておられる愛についても、どういったことを想定しておられるのかを評者は読み取ることができなかった。4章の締めくくりで、明らかに分離が適切だと判断される関係やつながりのなかに、守るべき「何か大切なもの」を見出す女性について次のように述べておられる。

> では、彼女が守ろうとしていたのは、いったい何なのだろうか。その提示には、非常に慎重になるべきであるが、ここではそれを「愛」と呼ぶことにする。共依存における「愛」とか、「偽物の愛」あるいは、共依存は、愛の「闇の側面」であると否認されるものである。しかし、その「偽物の愛」を築いている本人たちにとっては、それが紛れもない「愛」と認識されていることがある。あるいは、「本来愛（愛すること）そのものは、狂気＝幻想を秘めたもの」ではないだろうか。

上記のように、小西さん自身の立場の裏打ちとして、愛という概念を導入されるのであれば、それについてより詳しい説明をしていただきたく思う。この点が明確でない限り、共依存にたいする小西さんの新たな眼差しの理論的裏打ちが脆弱なものに思われてしまうのではないかという危惧を拭い去ることができない。

さらに、重要な概念について、小西さんの立場がどちらにあるのか、評者には読み取りにくい部分があった。たとえば、本物の愛と偽物のそれとを区別しておられるが、その規準がわかりにくいこと、共依存についても、生命が脅かされるおそれのある共依存と誰もが日常において経験しているそれとのどちらを扱っているのか明確でない箇所が見受けられる点が特に気にかかった。まず、本物／偽物の違いについてだが、そもそもそれぞれの定義はどういったものになるのだろうか。また、終章では、映画のなかに登場する破滅的な共依存関係について、「真実の愛」として扱われているが、小西さんの主張では、「偽物の愛」と客観的に評価されるものでも認めてしかるべきだという主張ではなかったのではないだろうか。本物／偽物の愛について、おそらく、どの立場から評価したものなのかについて混乱があるように思われたので、それぞれの定義を含めて整理して説明いただきたく思う。さらに、共依存を否定的に受け止めることなく、そうした価値を推奨しないまでも評価しないという主張を提示するのであれば、それが生命にかかわる場合か否かの線引きには繊細であるべきではないだろうか。おそらく、小西さんは、命にかかわる共依存を認める主張を繰り広げるつもりはないのであろうけれども、小西さんの記述からは、生命に関わる破滅的な共依存

関係も肯定するように読める箇所が散見されるように思われた。仮に小西さんが生命にかかわる共依存関係をも肯定的に捉える立場を打ち出しておられるのであれば、少なくとも生の行程を理論の中心に含むケアの倫理の立場とは相容れないことが、この点においても確認できるように思われる。

以上のことから、小西さんの『共依存の倫理』のなかでの主張は、これまでのギリガンのケアの倫理をめぐる諸研究に独自の解釈を加えたうえで、そうした既存の研究を超え出たところに成立した視座であるように思われる。したがって、『共依存の倫理』は、小西さんが見いだしたケアの倫理とは独立の「もうひとつの声」(a different voice)であると言えるかもしれない。評者自身は、少なくとも現時点では、こうした声を聞き届けることができないし、また、その必要を見いだし得ない。その意味で、小西さんの共依存の捉え方と見解を異にする。一方で、ケアの倫理とは、こうした自分とは異なる声を排除したり、隠蔽することなく、耳を傾ける姿勢が出発点となることは確かである。そうした意味で、小西さんの着想自体には、これからケアの実践研究を行う方が学び取れる示唆が含まれているように思われる。このようなケアの実践の試みが他分野でなされることは、ケアの倫理の立場からも示唆的であり、こうした挑戦が積み重ねられることは歓迎すべきことだと言えるだろう。

４．おわりに

以上のように、『共依存の倫理』をケアの倫理というひとつの倫理的立場から読み解くことで、３つの論点に分けて疑問を提示した。評者の主な疑問点は、おおよそ以下のように整理することができる。

疑問点⑴：共依存に評価を与えないことに伴う危険性

・共依存関係から健全な関係に移行しうる可能性を有している方々が、そうした関係に甘んじたままでいる状態に、一定の倫理的立場から否定的評価を与えることになぜ躊躇を覚えるのか。

・小西さんはギリガン同様、規範を示すことをしない立場をとっておられるのか。

・仮に小西さんがギリガンのような立場をとられるとして、共依存にたいして肯定的ないしは否定的な評価を与える立場を何をもって「倫理的ではない」とまで断じることが可能なのか。

疑問点⑵：理論と実践の関係をめぐる疑問

・小西さんは、理論と実践とのバランスをどのように考えておられ、また、その呼びかけは誰に向けたものなのか。

疑問点⑶：なぜ倫理的論点に踏み込まないのか

・愛という概念の内実、本物と偽物、真と偽の相違とはどういったものか。

・小西さんの言う「倫理」という言葉の含意とはどういったものなのか。

・小西さんが取り組まれたことが新しい倫理観や人間観を析出するところにあるとすれば、その先にどのような倫理観や人間観を描き出そうと考えているのか。

もちろん、こうした読み方が、ある意味では必ずしも適切な切り口ではないことは、冒頭で記したとおりである。本書は、共依存の歴史やその捉え方の移りゆき、その治療法や回復プログラムに潜む倫理観や人間観、自己観の析出、あるいは、当事者の声、関係の暴力性、フェミニズムと関わる議論など、多くの論点を含意している。そのため、どういった関心で読み解くかによって、本書は、上記の指摘とは異なる様相を呈して、読者の前に立ち現れてくるかもしれない。上記に上げたあるいはそれ以外の論点については、それぞれがご専門の方に、ご関心のある方に、また、それぞれの立場からご検討いただきたい。最後に、本書をきっかけに、共依存のなかにあって苦しんでおられる方々、それを支えておられる方々に寄り添える（ケアできる）方々が増え、また、これは私見であって、小西さんの考えとは食い違うだろうけれども、そうした人々が双方向的なコミュニケーションに基づく相互依存関係に移行するという成長を遂げられ、その人らしさを取り戻されることを願って、本稿の締めくくりとさせていただきたい。

文　献

Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge: Harvard University Press. (生田久美子・並木美智子 訳『もうひとつの声――男女の道徳観の違いと女性のアイデンティティ』、川島書店、1986 年)

―――(1987) ‘Moral orientation and moral development’, in Eva Feder Kittay and Diana T. Meyers (Eds.), *Women and Moral Theory*, Totowa, NJ: Rowman and Littlefield, pp.19-33. （小西 真理子 訳「道徳の方向性と道徳の発達」、『生存学』vol.7、2014 年、229-244 頁。）

早川 正佑 (2018)「小西真理子著『共依存の倫理 : 必要とされることを渇望する人々』(晃洋書房, 2017 年)」、『社会と倫理』、33 号、南山大学社会倫理研究所、224-225 頁、電子版は http://rci.nanzan-u.ac.jp/ISE/ja/publication/se/014882.html）。

金井 淑子 (2011)『依存と自律の倫理――「女（わ）／母（た）」の身体性から』、ナカニシヤ出版。

川本 隆史 (1995)『現代倫理学の冒険――社会理論のネットワーキングへ』, 創文社。

Kittay, E. F. (1999). *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, New York: Routledge. (岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』、白澤社、2010 年)

小西 真理子 (2016)「ケアの倫理に内在する自立主義: 相互依存・依存・共依存の検討を通じて」、『倫理学年報』、第 65 集、日本倫理学会、265-278 頁。

小西 聖子(2018)「書見台　小西真理子著『共依存の倫理――必要とされることを渇望する人々』」、『アディクションと家族』、33 巻 2 号、269-272 頁。

Mayeroff, M. (1971). *On Caring*, New York: Harper & Row Publishers. (田村真・向野宣之訳『ケアの本質――生きることの意味』、ゆみる出版、1993 年)

Noddings, N. (1984). *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, Berkley: University of California Press. （立山善康 他訳『ケアリング――倫理と道徳の教育――女性の観点から』、晃洋書房、1997 年）

―――(2002) *Starting at Home: Caring and Social Policy*, Berkley: University of California Press.

Rachels, J. (1999). *The Elements of Moral Philosophy*, Boston: McGraw-Hill College Press. (古牧徳生・次田憲和 訳『現実をみつめる道徳哲学――安楽死からフェミニズムまで』、晃洋書房、2003 年)

品川 哲彦 (2007). 『正義と境を接するもの――責任という原理とケアの倫理』, ナカニシヤ出版。

――― (2016)「ケア関係の構造分析」、『モラロジー研究』78 号、モラロジー研究所道徳科学研究センター、1-19 頁。

田中 朋弘 (2012)『文脈としての規範倫理学』、ナカニシヤ出版。

安井 絢子 (2019)「書評 :『共依存の倫理――必要とされることを渇望する人々』」、『倫理学研究』49 号、関西倫理学会、143-145 頁。